長岡市埋蔵文化財調査報告書

山下A遺跡

―市道山通96号線ほか改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2014

新潟県長岡市教育委員会

例　　言

1．本書は、新潟県長岡市柿町地内に位置する山下Ａ遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、市道山通96号線ほか道路改良事業に伴うものであり、長岡市教育委員会が実施した。

3．遺跡確認試掘調査に要した費用は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫の補助交付金を受けた。本発掘調査に要した費用は原因者である長岡市が負担した。

4．遺物の注記は、13＋山下Ａ＋出土位置＋層位＋取り上げ番号とした。

5．遺構番号は、遺構略号＋調査区全体の通し番号とした。

6．出土した遺物と調査に関わる資料は、すべて長岡市教育委員会で保管している。

7．調査の体制は以下のとおりである。

（平成25年度）

調 査 主 体	長岡市教育委員会（教育長　加藤 孝博）
事　務　局	長岡市教育委員会科学博物館（館長　山屋 茂人）
調 査 担 当	長岡市教育委員会科学博物館　主任　山賀 和也
調 査 補 助 員	小林 成光（株式会社　イビソク）
発 掘 作 業 員	伊部 直行　尾木 求　金安 常男　高橋 久美子　高橋 力　棚村 チイ 林 恭二　三浦 勝男　水沢 麗子

8．土器の実測は、加藤由美子（長岡市教育委員会科学博物館）の協力を得た。この他、本書の執筆・編集は、新田康則（同）の協力を得て、調査担当が行った。文責は調査担当にある。

9．発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）

石坂 圭介　小菅 将夫　菊池 正代　澤田 敦　宮尾 亨　柿町町内会

星野組　長岡市土木部道路建設課

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯…… 1
　1　調査に至る経緯
　2　遺跡の範囲とこれまでの調査
第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境…… 3
　1　遺跡の位置
　2　周辺の遺跡
第Ⅲ章　本発掘調査…… 6
　1　調査区の設定
　2　調査の経過
　3　基本層序
　4　遺構の説明
　5　遺物の説明
第Ⅴ章　まとめ……10
参考文献

挿図・表目次

第１図　遺跡位置図　1
第２図　遺跡の範囲とこれまでの調査位置図　2
第３図　長岡市位置図　4
第４図　周辺の遺跡　5
第１表　周辺遺跡一覧　4
第２表　遺物観察表　12

図版目次

図版１　遺跡全体図
図版２　１区遺構平面図
図版３　２区遺構平面図
図版４　１区個別遺構図①
図版５　１区個別遺構図②
図版６　１区個別遺構図③
　　２区個別遺構図
図版７　遺物実測図①
図版８　遺物実測図②
図版９　調査写真①
図版10　調査写真②
図版11　調査写真③
図版12　調査写真④
図版13　遺物写真①
図版14　遺物写真②

第Ⅰ章　調査に至る経緯

１　調査に至る経緯

山下Ａ遺跡が位置する柿地区は、本遺跡をはじめとして縄文時代の遺跡が密集している地域である。そのため、平成元年にゴルフ場やスキー場などの開発計画との協議に資するため長岡市教育委員会（以下、市教委と略称）が確認調査を行っており、その結果を基に開発が行われてきた。

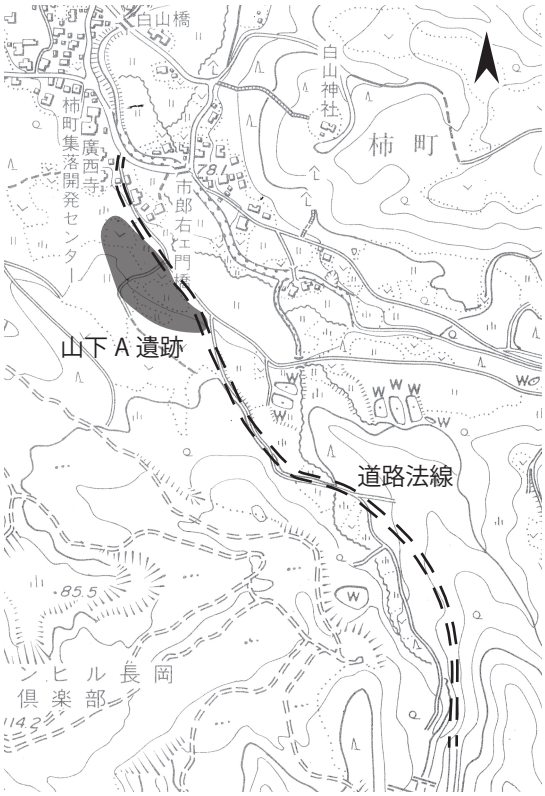
今回、市道山通96号線の道路改良工事が計画されたため、平成23年４月に長岡市土木部道路建設課（以下、事業者と略称）と本遺跡の取り扱いについて、協議を行った。その結果、計画された法線は、本遺跡に隣接する部分に設定されていたため、遺跡の広がりを確認する必要があることを伝えた。調査時期は、事業着手が平成25年度であることから、平成24年度に試掘調査を実施することとし、その結果を基にその後の協議を行い、必要があれば平成25年度に本発掘調査を行うことで合意した。

市教委は文化財保護法第99条１項の規定による埋蔵文化財発掘調査の着手を新潟県教育委員会教育長に報告し（平成24年10月10日付け長教博第212号）、平成24年10月10日～12日の３日間で試掘調査を実施した。その結果、いくつかのトレンチから遺構と数点の縄文土器と石器が出土した。これにより、事業計画地に遺跡が広がることが判明したことから、事業者と協議を行い事業着手前に本発掘調査を実施することで合意した。また、試掘調査の結果を受け、市教委は本遺跡範囲の変更を新潟県教育委員会教育長に報告した。（平成25年８月15日付け長教博第200号）

市教委は、文化財保護法第99条１項の規定による埋蔵文化財発掘調査の着手で文化財を新潟県教育委員会教育長に報告し（平成25年10月３日付け長教博第256号）、本発掘調査を開始した。

２　遺跡の範囲とこれまでの調査

山下遺跡の調査は、昭和22年に神林昭一氏等が発見（Ａ地点）し、中村孝三郎とともに小規模の発掘調査を行ったのが最初である。その後、昭和39年６月に中村孝三郎の指導のもと、長岡高等学校の人文科学部によって発掘調査が実施された。調査地は、丘陵東の緩やかな傾斜地に位置する地点であり、調査では崖線に対して平行するように２～3.5m×10mのトレンチを３本（１号～３号）設定した。主に１号トレンチと３号トレンチを調査し、平箱約50箱に及ぶ多量の土器、石器などが出土している。また、１号トレンチ南東部では、「密集石塊と、直径二メートルに及ぶ焼土、灰等の厚い堆積部分が見られ、平炉址が二ヶ所確認されたがピット及び柱穴とみられるものは検出されなかった。」３号トレンチでは、遺構は検出されなかった。２号トレンチは、昭和42年に科学博物館が調査を行い、遺構は検出されなかったが、遺物は多量に出土した。



第１図　遺跡位置図（1:10,000）

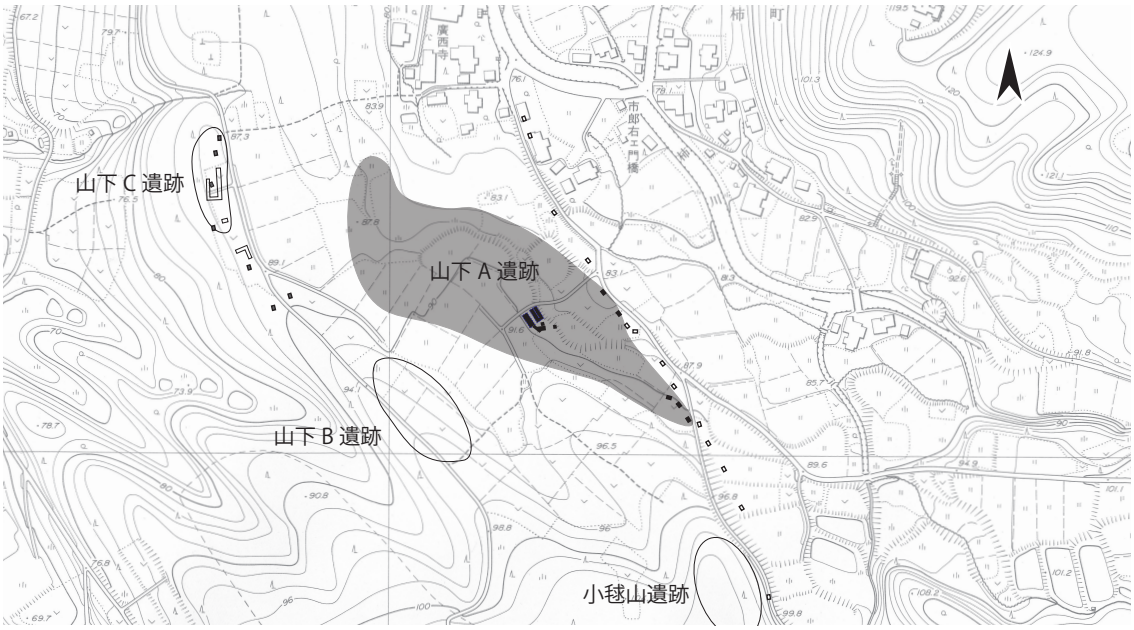
平成元年に長岡市教育委員会は、開発に伴う試掘調査を実施した。調査は、周辺も含めて２m×３mのトレンチを25ヵ所に設置し、実施した。その結果、Ａ地点のほかにＢ地点及びＣ地点で遺構・遺物の集中箇所が発見された。Ｂ地点では、耕作による撹乱のため包含層は削平されたものと考えられるが、半壊した石囲い炉跡や土坑、集石部分が検出された。また、Ｃ地点でも状況はＢ地点と同じであるが、土坑が１基検出されている。この結果から、山下Ｂ遺跡、山下Ｃ遺跡が新たに登録された。

平成14年から平成20年にかけて、NPOジョーモネスクジャパンが主体となって、火炎土器様式の年代を探ることを目的に発掘調査を実施した。調査は、土器捨て場と推定されるＡ地点の１号～３号トレンチの周辺にトレンチを合計４ヵ所設定し、土器の出土層位を把握することに重点を置いて実施された。その結果、火炎土器様式の初源的な特徴を有する土器が下層から出土し、上層から典型的な火炎土器様式の特徴を持つ土器が出土しており、これまで型式学的な変遷に頼って組み立てられていた編年が層位学的な成果からも確認されることとなり、重要な調査であった。また、平成21年には、遺跡の範囲を推定するため、ボーリング調査が行われている。

そして、本報告の発掘調査に先立つ試掘調査を平成24年度に市教委が実施した。その結果、少量の遺物と遺構が発見され、遺跡の範囲が拡大された。

これまでの調査の結果から、多量の遺物が出土している部分については土器捨て場と考えられ、集落の住居などはその西側の水田付近に存在すると推定されるが、現状ではその痕跡は見つかっていない。また、前述したようにＢ地点で石囲い炉跡が検出されているが、大部分が撹乱を受けており詳細は不明である。そのため、集落の中心部の位置を特定することが大きな課題となっている。

また、これまでの調査のうち1964・67年の２度に及ぶ調査で出土した遺物を中心に研究が進められてきた。出土遺物は、多量の土器のほか土偶や耳飾などの土製品、石斧や石鏃などの石器、石棒などの石製品が出土している。土器の時期は、縄文時代中期初頭から後期初頭にわたる土器が見られるが、ほとんどが中期初頭から中葉に位置づけられる。その中でも火焔型土器は、その初期段階に位置づけられる土器が出土し、それに伴って、北陸・東北・関東などの諸様式の土器が出土している。そのため、本遺跡は火焔型土器の成り立ちについて考える上で重要な位置を占めている。



第２図　遺跡の範囲とこれまでの調査位置図

第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境

１　遺跡の位置

長岡市は、新潟県のほぼ中央部に位置しており、市町村合併により西は日本海から東は守門岳までの広大な範囲が市域となっている。山下Ａ遺跡が所在する長岡地域は、その中央部を日本一の長さと流水量を誇る信濃川が縦断し、その両岸に沖積平野が広がっており、中心市街地は右岸に形成されている。平野は信濃川の氾濫源となっており、現在の集落は、氾濫原に残された微高地上に形成されている。

平野部の西側には東頸城丘陵から派生する西山丘陵が位置している。西山丘陵は、南南西から北北東に延びる丘陵で、東頸城地方では1,000mを越えた標高も長岡市周辺では300m程になり、沖積地に埋没している。丘陵の麓には数段の河岸段丘が形成されており、これらの河岸段丘は上流の中魚沼郡津南町・十日町市・小千谷市から続く大規模の段丘で、旧石器時代から縄文時代の遺跡が数多く存在する。一方、平野部の東側には魚沼丘陵から延びる東山丘陵が位置している。東山丘陵は、標高700mを越える急峻な地形で、北北東に向かって延びている。西山丘陵に比べ、河岸段丘は顕著ではなく、信濃川に流れ込む栖吉川や椿桂川・柿川などの中小河川によって山裾に扇状地が形成されている。東山丘陵の遺跡は、丘陵先端付近の平坦部や扇状地上に縄文時代から古代の遺跡が多く存在している。今回調査した山下Ａ遺跡は、東山丘陵の信濃川支流である柿川によって開析された段丘上に位置している。標高は約90mである。現況は水田や畑である。

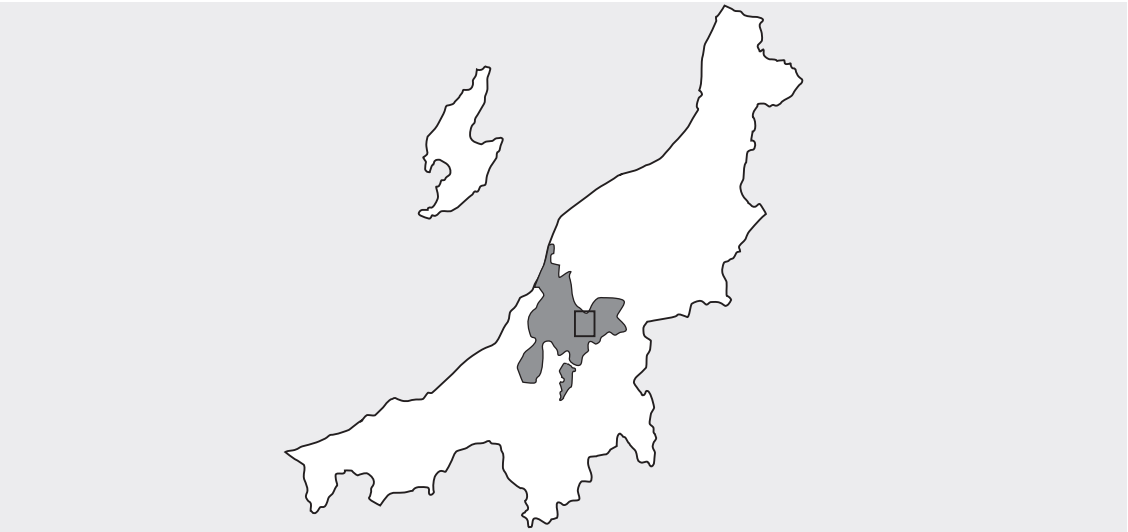
２　周辺の遺跡

柿町地区を含む東山丘陵には、多くの遺跡が存在するが、今回調査した本遺跡は縄文時代中期であることから縄文時代の遺跡を概観することにしたい。

縄文時代の東山丘陵で最も古い遺跡は松葉遺跡で、少量ではあるが早期後半に位置づけられる土器が出土している。前期の遺跡としては、金倉遺跡、三貫梨遺跡、小毬山遺跡が挙げられる。いずれも、少量土器が確認されているのみで、遺構や集落の状況は不明である。中期になると遺跡の数が急激に増加しピークを迎える。その中には、多くの遺構や遺物が出土する大規模な集落跡が出現し、それらは地域で中心的な性格を持った集落と考えられている。これらの集落として、本報告である山下Ａ遺跡のほか、茨崎遺跡、中道遺跡、西片貝遺跡、松葉遺跡などが挙げられている。

中道遺跡は、中期中葉から晩期まで続く大規模集落で、東山丘陵沿いでは唯一集落全体の発掘調査が行われた貴重な事例である。特に中期の集落構造については、詳細な検討がなされており、集落構成要素である廃棄域、居住域、貯蔵域、墓域、広場は、広場を中心として同心円状に区分される重帯構造を持ち、また住居群を分割する分節構造が見られ、環状集落の大きな特徴を備えている。したがって、その形状は広場を中心に同心円状に竪穴住居跡や掘立柱建物跡や土坑などが配される典型的な環状集落ではないが、扇状地に突き出た舌状台地という地形の制約を受けて、やや変形しているものの環状集落と考えられるものである。

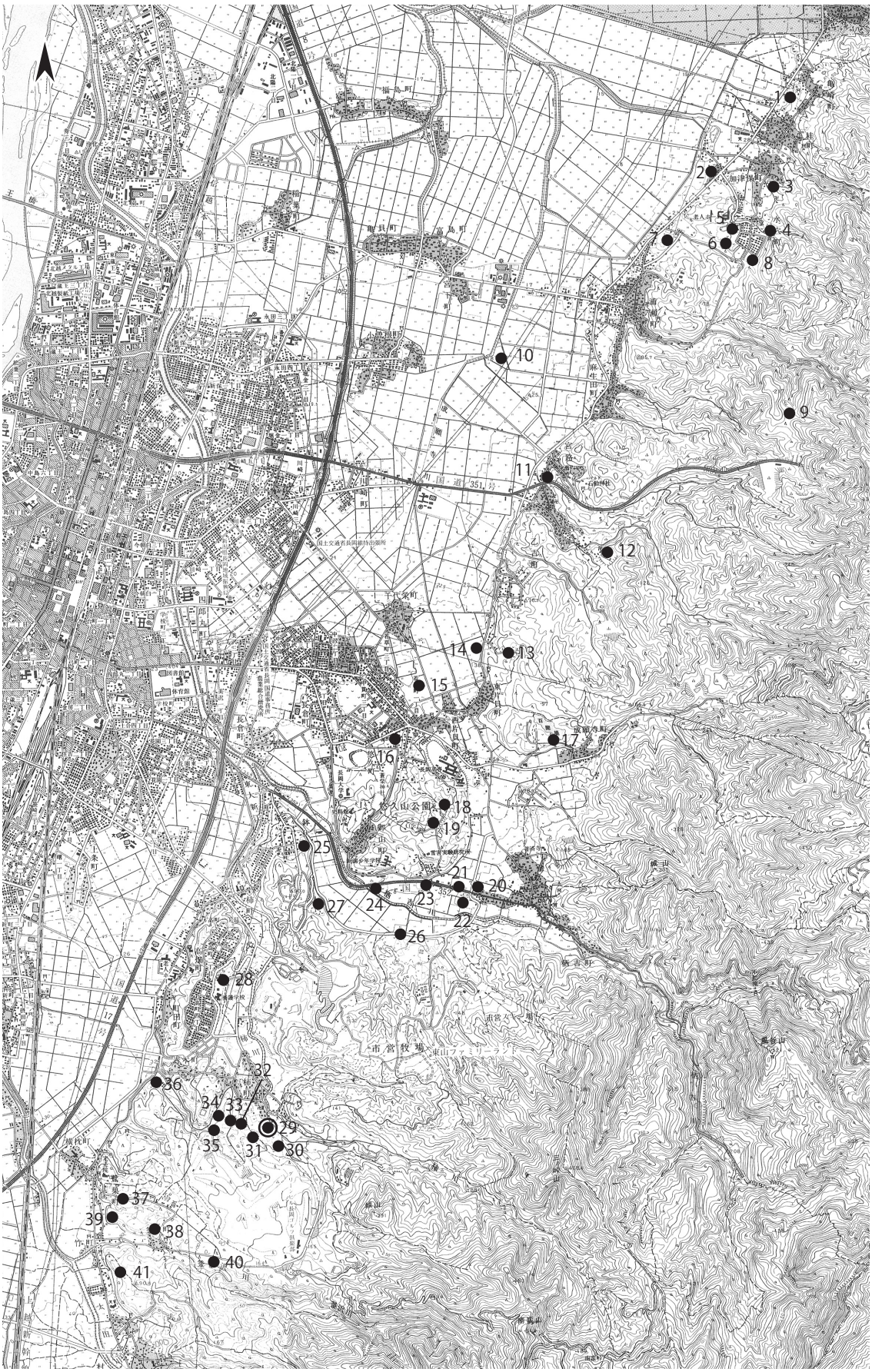
後・晩期の遺跡は、中期に比べると減少する。主な遺跡には西片貝遺跡、下条山遺跡、山下Ｂ遺跡、中道遺跡、大明神遺跡がある。中道遺跡は、中期から晩期にかけて継続的に営まれた大規模な集落遺跡である。大明神遺跡も採集された遺物から中道遺跡と同時期に営まれた集落であると推定される。しかし、現在のところ調査が行われておらず、詳細は不明瞭である。



第３図　長岡市位置図

番号	名称	所在地	時期	備考
1	大門Ｂ	亀崎町字大門 545 他	不明	
2	茨崎	加津保町字茨崎・大原	中期	『長岡市史』資料編１　考古
3	加津保上ノ山	加津保町字上ノ山 2446 他	不明	
4	水穴前山	水穴町字前山 2554 他	不明	
5	長者原西Ａ	水穴町字長者原西 45 他	不明	
6	長者原西Ｂ	水穴町字長者原西 61-1 他	中期	
7	阿字原Ｃ	浦瀬町字阿字原 9305 他	不明	
8	長者原東	水穴町字長者原東 314-1	中期	
9	桂貝	浦瀬町字桂ヶ入	後期	『長岡市史』資料編１　考古
10	長表	麻生田町字長表	不明	
11	出清水	宮路町字出清水 1191 他	中期	
12	堂ヶ峯	乙吉町字堂ヶ峯 3508 他	不明	『長岡市史』資料編１　考古
13	東片貝Ⅱ	成願寺町字才勝 1358 他	中期	『長岡市史』資料編１　考古
14	東片貝Ⅰ	東片貝町字下山 1413-1 他	中期	『長岡市史』資料編１　考古
15	西片貝	西片貝町字前田 1409 他	中期～後期	『長岡市史』資料編１　考古
16	戸左衛門	悠久町 118-1 他	後期	『長岡市史』資料編１　考古
17	百間堤	成願寺町（百間堤）	中期	
18	栖吉前山	栖吉町字前山 9558-1 他	不明	
19	御山前山	御山町字前山	中期	
20	大明神	栖吉町（一枚田）870-1 他	中期～晩期	『長岡市史』資料編１　考古
21	栖吉	栖吉町字中道	中期	『長岡市史』資料編１　考古
22	中道	栖吉町字中道	中期～晩期	『中道遺跡』1998
23	栖吉前田	栖吉町字清水田 775-1 他	不明	
24	三貫梨遺跡	栖吉町字清水田 492-1 他	前期～中期・晩期	『三貫梨遺跡　第１次発掘調査』1986 『三貫梨遺跡　第２次発掘調査』1987
25	西谷東	鉢伏町字西谷 1050-1 他	不明	
26	松葉	栖吉町清水田 1258 他	早期・中期～晩期	『松葉遺跡』1994
27	栖吉行塚	栖吉町字岩野 3055-9 他	不明	
28	長岡高畑	柿町切通シ 4157	晩期	
29	山下Ａ	柿町字南田	中期	『長岡市史』資料編１　考古
30	小毬山	柿町字南田	前期～中期	『長岡市史』資料編１　考古
31	山下Ｂ	柿町山下	中期～後期	『長岡市史』資料編１　考古
32	山下Ｃ	柿町金倉 4707 他	晩期	『長岡市史』資料編１　考古
33	金場	柿町字金倉	前期	『長岡市史』資料編１　考古
34	青木	柿町字金倉・平兵衛山	中期	『長岡市史』資料編１　考古
35	金倉	柿町字金倉	前期	『長岡市史』資料編１　考古
36	下条山	横枕町字下条山 876 他	中期～後期	
37	金塚	鷺巣町字金塚甲 370 他	不明	
38	八坊塚	釜沢町八坊塚乙 360 他	不明	
39	天神山	釜沢町八坊塚乙・横枕町	中期	
40	山入	釜沢町字山入	中期	『長岡市史』資料編１　考古
41	長者原	村松町・釜沢町長者原甲	中期	『長岡市史』資料編１　考古

第１表　周辺遺跡一覧



第４図　周辺の遺跡（1:50,000）

第Ⅲ章　本発掘調査

１　調査区の設定

調査区は、確認調査で遺物、遺構が確認されたトレンチ範囲と道路法線を照合し設定した。その結果、調査区を２ヵ所に設定し、南に位置する調査区を１区、北に位置する調査区を２区とした。調査区のグリッドは、世界測地系Ｘ＝155970・Ｙ＝32850を基準に南北方向に１辺10ｍのグリッドを組み、大グリッドとした。グリッド番号は北西角を基点として南北に１、２、３・・・、東西にＡ、Ｂ、Ｃ・・・をつけた。また、大グリッドの中を１辺２ｍの小グリッドを組み、25区画に分割し、北西角を１として西から東に番号を振った。

２　調査の経過

平成25年10月２日から作業小屋、機材、重機を搬入し、10月７日に１区から重機で表土剥ぎを開始した。その後、調査区壁面の整形を行い包含層掘削に着手した。遺物は、少量であり、主体は縄文時代の遺物であった。10月15日には包含層掘削が終了した。10月16日の大雨により周辺の水が調査区に流れ込む状況になり、調査が困難な状況になったため、急遽調査区縁辺部に排水溝を設置した。10月21日に遺構検出作業を行い、引き続き遺構精査に入った。10月31日に１区の空中写真撮影を行い、掘立柱建物跡の検証を行った。また、並行して２区の調査に着手した。２区でも周辺の水が流れ込む状況だったため、１区と同じく縁辺部に排水溝を設置した。包含層掘削および遺構検出作業を11月６日まで行った。後世の撹乱が所々に見られ、さらに８Ｆ23～25グリッド付近は一段下がっており、耕作のため削平されたものと考えられる。遺構は、中央西側部分にまとまって検出されたのみである。２区の遺構は、小さく浅いものが多い。11月７日完掘状況写真を撮影し、11月11日に全ての調査を終了した。その後、11月18日に発掘機材を撤収した。

３　基本層序

調査区の現況は、畑地及び荒蕪地である。調査区の堆積状況は大きく分けて、４層に分類できる。以下、各層の堆積状況について、記載する。

Ⅰ層　褐色の表土層である。１区では、上流からの土石流によって粘性の強い浅黄橙～黄橙土が部分的に堆積しており、主に３・４グリッドで堆積が認められた。褐色土と混ざる量で２層に分けられる。この浅黄橙～黄橙土が見られない部分については、調査地がかつて水田であったことから、削平されているものと思われる。２区では、土石流による浅黄橙～黄橙土の堆積は確認されなかった。

Ⅱ層　黒褐色土で炭化物を含む。浅黄橙～明黄褐色粒の量によって、２つに細分できる。

Ⅲ層　黒色土層で遺物包含層である。にぶい黄褐色土・黒褐色土を少量含む。縄文土器、中世の珠洲焼が出土している。Ｂ３－７グリッド付近から南側の調査区では、拳大の礫を多量に含む。

Ⅳ層　黄褐色砂質土層である。この面で遺構を確認した。小礫からかなり大きなサイズの礫を多量に含み、３・４グリッドでは、径が１ｍもあるような礫を含む。締まりは強い。

地形は、南東から北西に向かって緩やかに傾斜する。２区は傾斜がやや強いため、10・11グリッド付近ではⅢ層の遺物包含層が薄くなっている。

４　遺構の説明

１区

１区では75基の遺構を検出した。遺構は調査区の中央部付近に集中しており、北西及び南東の調査区の端は遺構の分布が希薄である。特に南東端には、Ⅳ層に巨大なものを含む礫が多量に含まれているため、遺構の分布に影響を与えているかもしれない。検出された遺構は、掘立柱建物跡、溝、土坑、ピットである。

掘立柱建物

ＳＢ１　Ｂ２・Ｂ３グリッドにまたがって検出された。Ｐ30・37・41・42・51で構成される。桁行２間、梁行１間分を確認した。柱間は1.8mである。建物は、北東方向に延びており調査区外まで広がるものと考えられる。柱穴の規模は、長径で28㎝～65㎝、確認面からの深さは19㎝～38㎝である。柱穴からの遺物の出土はない。

各柱穴の覆土は、黒色土が主体となっており、堆積状況からは明確な柱跡を確認することができなかった。また、Ｐ30・42では底面に礫が確認されたが、Ⅳ層が礫を多量に含むこと、また確認された礫がⅣ層にしっかり埋まっていることから根固め石ではなく、Ⅳ層に含まれる礫と判断した。

溝

ＳＤ55　Ｃ３－11グリッドで検出した遺構である。北東―南西方向にやや蛇行しながら延び、北西端は遺構外に延びる。深さは13cmでごく浅い溝である。出土遺物はない。

土坑

ＳＫ27　Ｂ２－21グリッドで検出した遺構である。平面形はやや不整な円形で径約90cmである。断面形は箱形である。確認面からの深さは43cmと非常に浅いが、ほぼ垂直に掘り込まれ底部も円形を呈することや、覆土が壁面からはがれやすい点から、井戸の可能性もあろう。出土遺物は、上部から縄文土器が２点（５・６）出土している。

ＳＫ48　Ｂ３－９グリッドで検出した遺構である。平面形は不整形で北東―南西方向に長い。長さ176cm、幅102cm、深さ48cmである。断面形は階段状で、ほぼ中央付近が最も深く、Ｂ－Ｂ’ラインの両側にテラス状の面が形成されている。出土遺物はない。

ＳＫ49　Ｂ３－14グリッドで検出した遺構である。平面形は楕円形で、長径89cm、短径54cm、深さ28cmを測る。断面形は台形状である。出土遺物はない。

ＳＫ52　Ｂ３－15・20グリッドで検出した遺構である。平面形はやや不整な楕円形で、長径134cm、短径90cm、深さ34cmを測る。断面形は、台形状である。底面は、西から東に向かって緩やかに上がっている。覆土はほぼ水平に堆積している。出土遺物は、縄文土器が１点（７）出土している。

ピット

Ｐ16　Ｂ２－16グリッドで検出されている。平面形は不整な円形で、直径49cm、深さは21㎝を測る。断面形は、台形状である。出土遺物は、縄文土器１点（１）が出土している。

Ｐ18　Ｂ２－12グリッドで検出された遺構である。平面形は不整な楕円形で、長径102cm、短径45cmを

測る。断面は、漏斗状であるが、西側に小さなテラス状の段を持つ形で、深さは39cmである。出土遺物は、２層から縄文土器１点が出土しているが、微細なため実測に適さなかった。

Ｐ31　Ｂ２－22グリッドで検出された遺構である。平面形は不整な楕円形で、長径50cm、短径18cm、深さ17cmを測る。断面は箱状で覆土は、１層が２層を切るような堆積になっている。出土遺物は１層から縄文土器が１点（2）出土している。

Ｐ39　Ｂ３－３グリッドで検出された遺構である。平面は不整形で、長径75cm、短径48cmを測る。底面は一様ではなく東側が最も深くなっており、深さは19cmである。出土遺物は、縄文土器が１点（3）出土している。

Ｐ61　Ａ２－３グリッドで検出された遺構である。平面形は円形で径40cm、深さは20cmである。断面形は、台形状である。小形のピットであるが、敲石が１点（32）、石皿が２点（33・34）、礫が２点出土した。

２区

２区では、10基の遺構が検出された。遺構は、調査区西側の中央付近に集中している。調査区北側の１段下がった部分は、後世の改変を受けて削平されたものと判断される。検出された遺構は、土抗とピットである。

土坑

ＳＫ93　Ｆ９－25グリッドで検出された。平面形は不整な楕円形で、長径76㎝、短径57㎝、深さ43㎝を測る。断面は台形状で、底面は平坦である。覆土は黒色土の単層である。出土遺物はない。

ＳＫ95　Ｆ10－５グリッドで検出された。平面形は楕円形で、長径78㎝、短径69㎝、深さ33㎝である。断面は、テラス状の面が見られる箱形で、底面は平坦である。覆土は黒色土を中心としたものである。出土遺物はない。

ピット

Ｐ92　Ｆ９－20グリッドで検出された。平面形はやや不整な円形で、長径64㎝、短径59㎝、深さ20㎝を測る。断面は半円状で、覆土には小石を含む。出土遺物はない。

５　遺物の説明

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器がほとんどであり、わずかに中世の土器が含まれる。また、２区での出土遺物は１点（36）であり、残りはすべて１区からの出土であった。出土した土器は、小片がほとんどであり図化に適さない物が多いが、極力図化し記載した。

縄文土器

１はＰ16から、２はＰ31からの出土である。両者とも縄文を施した胴部破片である。３はＰ39からの出土である。口縁部に加飾隆帯文を巡らし、その上部は無文、下部は撚糸文を施す（註１）。口縁端部は欠損している。中期末葉に位置づけられる。４はＰ78からの出土である。斜位の撚糸文を施した胴部破片である。５・６はＳＫ27からの出土である。５は摩滅が激しいが、両方とも縄文を施した胴部破片である。７はＳＫ52からの出土で、縄文が施される胴部破片である。

８～28までは包含層出土である。８は、口縁部に交互刺突文が施されるもので、浅鉢になるものと思われる。中期前葉に位置づけられよう。９は、火焔型土器の胴部破片である。縦位の隆線文が伸びている。10は、口縁直下に２条の加飾隆帯が巡る。加飾隆帯の刺突は、斜めから抉るように施されたものである。11は、口縁部で斜位に細かな撚糸文を施す。12・13は、縄文を施す胴部破片である。14は、口縁部と胴部の境目に縄の圧痕を施し、口縁部は無文帯で、胴部には縄文を施す。器形はやや内湾する。15・16は無文の口縁部資料である。15は波状口縁になるもので、16は口縁が外反するものである。17～24は縄文を施すものである。25～28は条線文の破片である。すべて斜位の条線文で、27・28は線が細い。29は表土層出土で、縄文を施した胴部破片である。

土製品

土製円盤が２点出土した。30は器面に縄文が施されている。右側縁の磨耗が激しい。31は器面には一部縄文が見られる。全体的に磨耗が激しい。

石器

32～34は、Ｐ61からの出土である。32は敲石で、右側面に摩滅面がある。33・34は石皿である。33は扁平で平面形が台形に近い形状の石で、表裏両面に摩滅が見られる。下の左右両側の角は、被熱し黒く焼け焦げたような部分がある。34は、楕円形の扁平な石で、表裏両面に摩滅が見られる。35は、１区包含層出土の磨石である。片面に摩滅が見られる。36は使用痕のある剥片で、２区包含層からの出土である。主要剥離面と同じ方向および逆方向の剥離面によって構成されており、180度の打面転移があったことが想定される。正面右側縁部に連続した微細剥離痕が見られる。石材は、珪質頁岩である。

中世遺物

37～39は珠洲焼である。すべて１区包含層からの出土である。37・38は甕の胴部である。37は、外面に平行タタキが施されるが、後世の打痕が多くあり、依存状態はあまりよくない。内面は、当て具痕を密なヨコナデでナデ消している。38は、外面に綾杉状の平行タタキが施される。39～41は片口鉢である。40・41は口径が復元でき、40が33.0cm、41が32.4cmである。39は、不明瞭であるが１単位７条以上の卸目が施されている。いずれも小片で、詳細は不明であるが、吉岡編年のⅣ～Ⅴ期に属するものであろう。

第Ⅴ章　まとめ

（1）はじめに

山下Ａ遺跡は、市道山通96号線ほかの改良事業に伴い行われた発掘調査で、調査面積は500㎡である。今回の調査では、溝・掘立柱建物跡・土坑・ピットなどの遺構と縄文時代中期前葉から後期前葉の土器および中世の珠洲焼などの遺物が発見された。遺物・遺構はほとんど１区からの検出であり、２区での遺構と遺物の検出は、ごく少数であった。このことから、２区は、山下Ａ遺跡の集落の縁辺部に位置するものと考えられる。１区においても出土遺物が少なく、住居などの性格が分かる遺構がほとんど発見されず、山下Ａ遺跡における「集落の中心地がどこに存在するのか」という課題について、今回の調査でも明確な成果を得ることができなかったのは残念であった。

（2）縄文時代

これまでの本遺跡の調査で発見されている土器は、縄文時代中期初頭から後期初頭の時期であり、その中心は中期初頭から中葉に位置づけられているが、今回出土した土器からはこれまでの調査とやや異なった調査成果が得られた。

今回の調査で出土した縄文土器は、破片資料のため時期の判別は難しいが、文様構成や胎土、色調などから判断し中期前葉から後期前葉に属するものと考えられる。そのうち主体となる時期は、後期前葉の土器である。しかし、今回の調査では後期初頭に位置づけられる三十稲場式とわかる刺突文の土器が出土していないため、中期前葉から後期前葉まで継続していたのかどうかは慎重な判断が必要である。

１区の調査地点は、土器捨て場と見られる地点のさらに下であり、集落の中心地があると考えられる段丘面の一段下に位置する。そのため、１区の調査地点と一段上の面に集落が形成されていたと想定すると、中期の集落と後期の集落が形成された位置が違うことが考えられる。このことは、栖吉地区に位置する中道遺跡あるいは、信濃川対岸に位置する岩野原遺跡において、地形の制約を受け、時期によって遺跡内を集落が位置を変えて形成されることが明らかとなっているが、本遺跡で当てはまるかどうかは、今後の資料の増加を待って検討したい。

２区の包含層から出土した使用痕のある剥片は、非在地性の石材（註２）が用いられており、形状など総合的に判断すると旧石器時代に属する可能性がある。さらに、基部調整が甘いが、東山型ナイフ形石器に類するものと見ることもできる。しかし、時期決定については、黒色土中からの出土であり、出土点数が１点のみであることから判断は慎重にならざるを得ない。これがナイフ形石器であると仮定した場合、周辺に旧石器時代の遺跡が存在する可能性が出てくるが、現状では本遺跡の周辺で最も古い遺跡で縄文時代前期の小毬山遺跡で、旧石器時代にさかのぼる遺跡は存在しない。したがって、この剥片の評価については、今後の資料の増加を待って検討することにしたい。

（3）中世

中世の遺物の出土は少量で、明確に中世に属する遺構はないが、１区で発見された掘立柱建物跡（ＳＢ１）の年代を検討することにしたい。

掘立柱建物跡の帰属年代は、出土遺物がないため確実な年代を与えることは難しい。そこで、栖吉地区に所在する中道遺跡の縄文時代後期の建物跡の柱穴規模を見てみると、小さいもので直径50cm、大き

いものでは120cmもあり、今回の柱穴規模と大きく違う。一方で、同じく栖吉地区に位置する中世の松葉遺跡から見つかった建物跡の柱規模を見てみると、20cm～60cmで、この幅に今回の調査で発見された柱穴の規模は収まってくる。したがって、柱穴規模の比較から、またわずかであるが珠洲焼などの中世の遺物が出土していることも踏まえると、中世の建物跡である可能性が高い。

掘立柱建物跡が中世に属するとすれば、周辺に所在する柿館跡との関連を想定させる。柿館跡は、山下Ａ遺跡より約200m北に位置し、南東約1.5kmのところの城山山頂部に位置する柿城跡の居館と見られる。遺構は、一辺約100mの方形状をなしているが、中央部に掘り込まれた堀切によって東西の二郭に区画されるものと推定されている。「山下」という地名は、要害の麓によくみられる地名であることから、柿館を中心とした根小屋集落が成立していたものと考えられ、今回の調査で発見された中世の遺構・遺物はその一部と考えることもできよう。しかし、柿館および柿城の築造時期や築造者、変遷などを示す史料は残されていないため、存続期間が不明である。したがって、調査で出土した遺物は吉岡編年Ⅳ～Ⅴ期に位置付けたが、柿館と同時期に存続したかどうかは、今後の検討課題である。

註）

註１　城之腰類型に属すると考えられる。

註２　山形でよく見られる、珪質頁岩である。

参考文献

阿部　昭典　2008「沖ノ原式土器」小林達雄編『総覧　縄文土器』アム・プロモーション

阿部　昭典　2009「沖ノ原式土器の編年に関する一試論」『新潟県考古学会設立20周年記念論集　新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会

石坂　圭介　2008「三十稲場式土器」小林達雄編『総覧　縄文土器』アム・プロモーション

小熊　博史　2002「東山丘陵における縄文時代の集落跡―中道遺跡の中期集落―」『長岡市立科学博物館研究報告』第37号　長岡市立科学博物館

柏崎市教育委員会　2001『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第37集　十三本塚北』

越路町教育委員会　1993『越路町文化財報告書第20輯　多賀屋敷遺跡―第二次発掘調査報告書―』

長岡市編　1992『長岡市史』資料編１　考古

長岡市教育委員会　1981『埋蔵文化財発掘調査報告書　岩野原遺跡』

長岡市教育委員会　1990『長岡市内遺跡群発掘調査報告書　山下遺跡・青木遺跡・小毬山遺跡』

長岡市教育委員会　1998『中道遺跡』

長岡市教育委員会　2011『多賀屋敷遺跡Ⅳ』

長岡市教育委員会　2013『平成24年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』

中村　孝三郎　1966『長岡市立科学博物館研究調査報告　第８冊　先史時代と長岡の遺跡』長岡市立科学博物館

宮尾　亨　2011「新潟県長岡市柿町　山下遺跡の発掘調査」『博物館における縄文食プログラム策定の基礎資料収集及び新分析手法の開発』

第２表　遺物観察表

※胎土　石英（英）、長石（長）海面骨針（海）、黒色粒子（黒）、白色粒子（白）、土器砕片（土）で表記した。

縄文土器

№.	出土位置	種別	器種	時期	文様構成	主要含有物	色調（外 / 内）	備考
1	B2-16	縄文土器		後期前葉		土	橙 / 暗灰黄	
2	P31	縄文土器		後期前葉		英	明褐 / にぶい黄橙	
3	P39	縄文土器		中期末葉	加飾隆帯	土	にぶい橙 / にぶい黄橙	
4	P78	縄文土器		後期前葉	斜位の撚糸文	土	黄橙 / 淡黄	
5	SK27	縄文土器		後期前葉		土・長・英	浅黄橙 / にぶい黄橙	
6	SK27	縄文土器		後期前葉		土・黒	にぶい黄橙 / 明黄褐	
7	SK52	縄文土器		後期前葉		英・黒	にぶい黄橙 / にぶい黄	
8	B2-17	縄文土器	浅鉢	中期前葉	交互刺突文	長・英	にぶい褐 / 灰黄褐	
9	B3-7	縄文土器		中期中葉	縦位の隆線文	長・英	橙 / 灰黄	
10	A2-14	縄文土器		中期末葉	２条の加飾隆帯	土・白	にぶい黄橙 / にぶい黄橙	
11	A1-13	縄文土器		中期後葉	斜位の撚糸文	土・英	にぶい黄橙 / にぶい橙	
12	A1-13	縄文土器		中期後葉		土・英・長	にぶい黄橙 / にぶい黄橙	
13	C3-17	縄文土器		中期後葉		土・英	にぶい黄橙 / にぶい黄橙	
14	B2-11	縄文土器		後期前葉		土・英	にぶい黄橙 / にぶい黄	
15	B2-11	縄文土器		後期前葉		土・英	暗灰黄 / 暗灰黄	
16	B2-21	縄文土器		後期前葉		土・長・黒	橙 / にぶい黄橙	
17	B2-17	縄文土器		後期前葉		土・英・石	明黄褐 / にぶい黄橙	
18	A2-20	縄文土器		後期前葉		土・英	にぶい橙 / 黒褐	
19	B2-11	縄文土器		後期前葉		土・英	にぶい黄橙 / 灰黄	
20	B2-12	縄文土器		後期前葉		土・英	灰黄橙 / にぶい黄橙	
21	B2-12	縄文土器		後期前葉		土・英	にぶい黄橙 / 明黄褐	
22	B2-11	縄文土器		後期前葉		土・英	灰黄 / 灰黄	
23	B2-12	縄文土器		後期前葉		土・黒	橙 / 橙	
24	A2-25	縄文土器		後期前葉	斜位の条線文	土	橙 / 橙	
25	A1-13	縄文土器		後期前葉	斜位の条線文	土	にぶい黄橙 / 橙	
26	B2-21	縄文土器		後期前葉	斜位の条線文	土・長・英	にぶい黄橙 / 明黄橙	
27	A2-10	縄文土器		後期前葉	斜位の条線文	土・英	黒褐 / 橙	
28	A2-10	縄文土器		後期前葉	斜位の条線文	土・黒	にぶい黄橙 / にぶい黄橙	
29	表土	縄文土器		中期後葉		土・英・石	にぶい橙 / 橙	
30	A1-13	土製品	土製円盤			土・英	にぶい橙 / にぶい橙	
31	B2-17	土製品	土製円盤			土	にぶい黄橙 / 褐灰	

石器

（cm）

№.	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	石材	備考
32	P61	磨石・敲石	9.8	6.6	4.3	砂岩	
33	P61	石皿	22.3	21.2	5.6	安山岩	被熱を受けている
34	P61	石皿	27.2	21.7	9.4	安山岩	
35	B3-24	磨石	8.3	6.7	4.7	安山岩	
36	G10-24	剥片	10.9	3.7	1.0	珪質頁岩	微細剥離痕あり

中世遺物

№.	出土位置	種別	器種	時期	主要含有物	色調（外 / 内）	備考
37	表土	珠洲焼	甕	14 ～ 15 世紀	英・黒	オリーブ黒 / 灰	
38	B3-12	珠洲焼	甕	14 ～ 15 世紀	黒・白	灰 / 灰	
39	B2-6	珠洲焼	片口鉢	14 ～ 15 世紀	英・黒	灰 / 灰	７条以上１単位のすり目
40	B2-24	珠洲焼	片口鉢	14 ～ 15 世紀	黒・白	灰 / 灰	
41	A2-25	珠洲焼	片口鉢	14 ～ 15 世紀	黒・海	灰 / 灰	

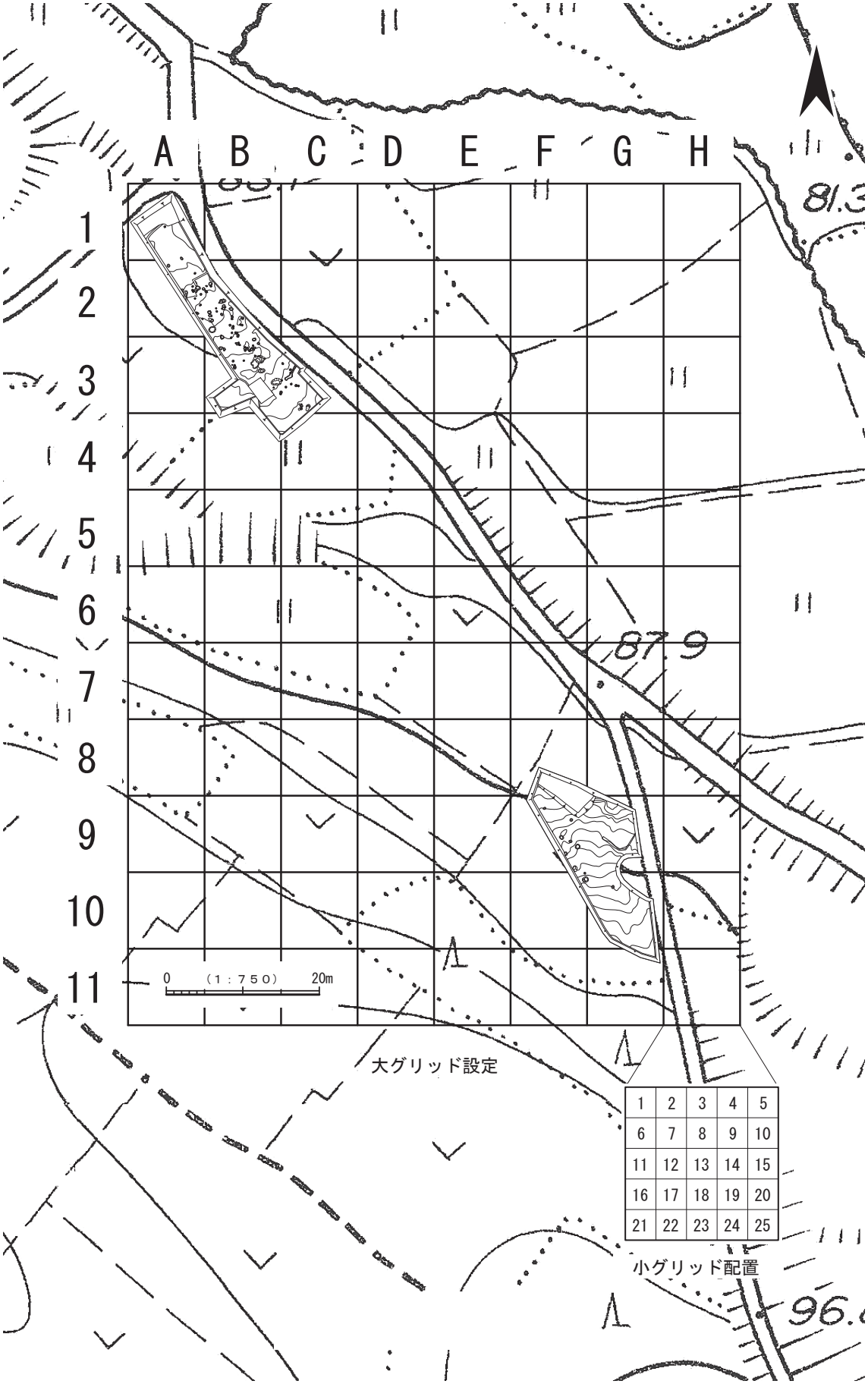
図　　版

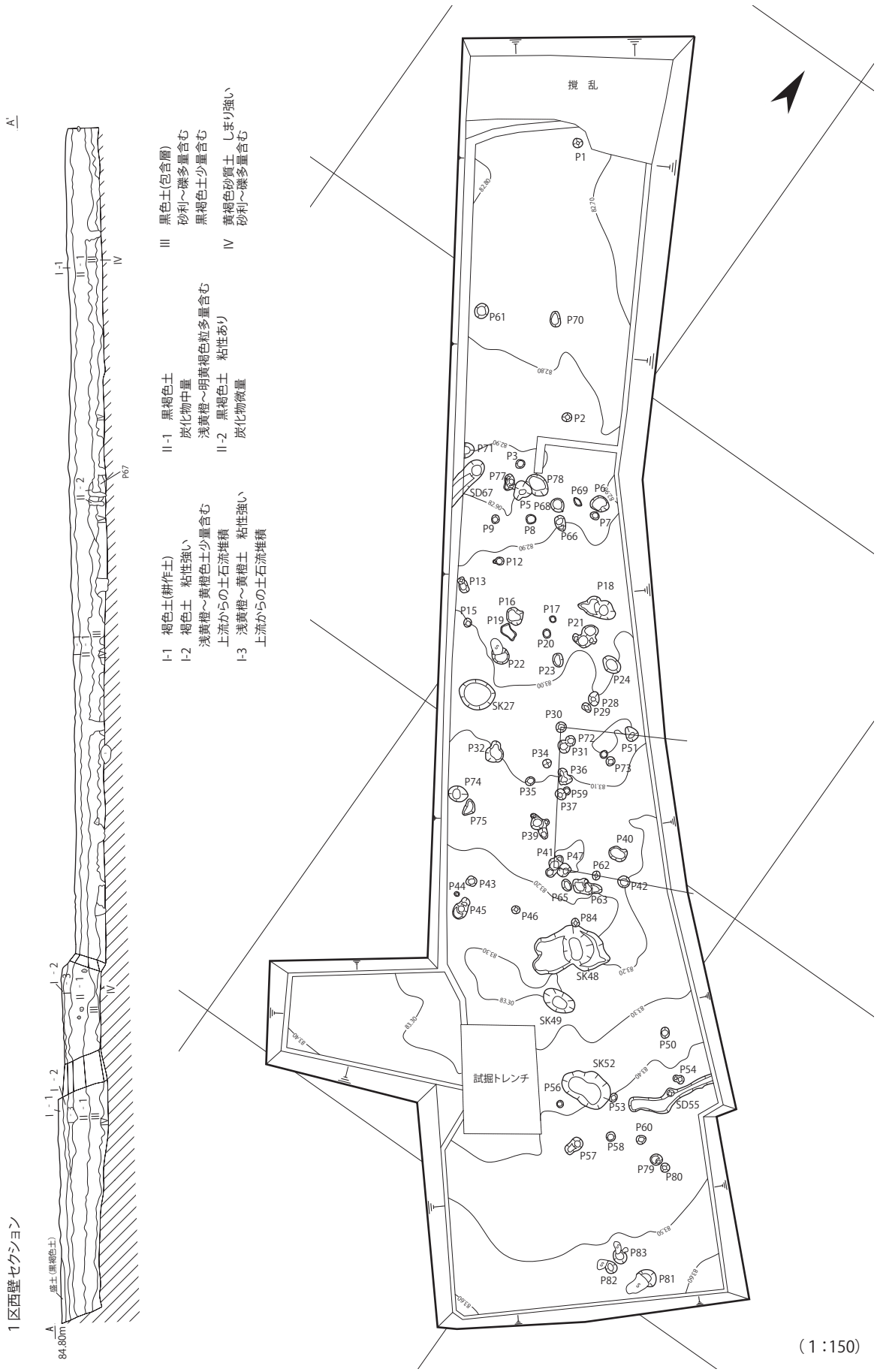
凡例

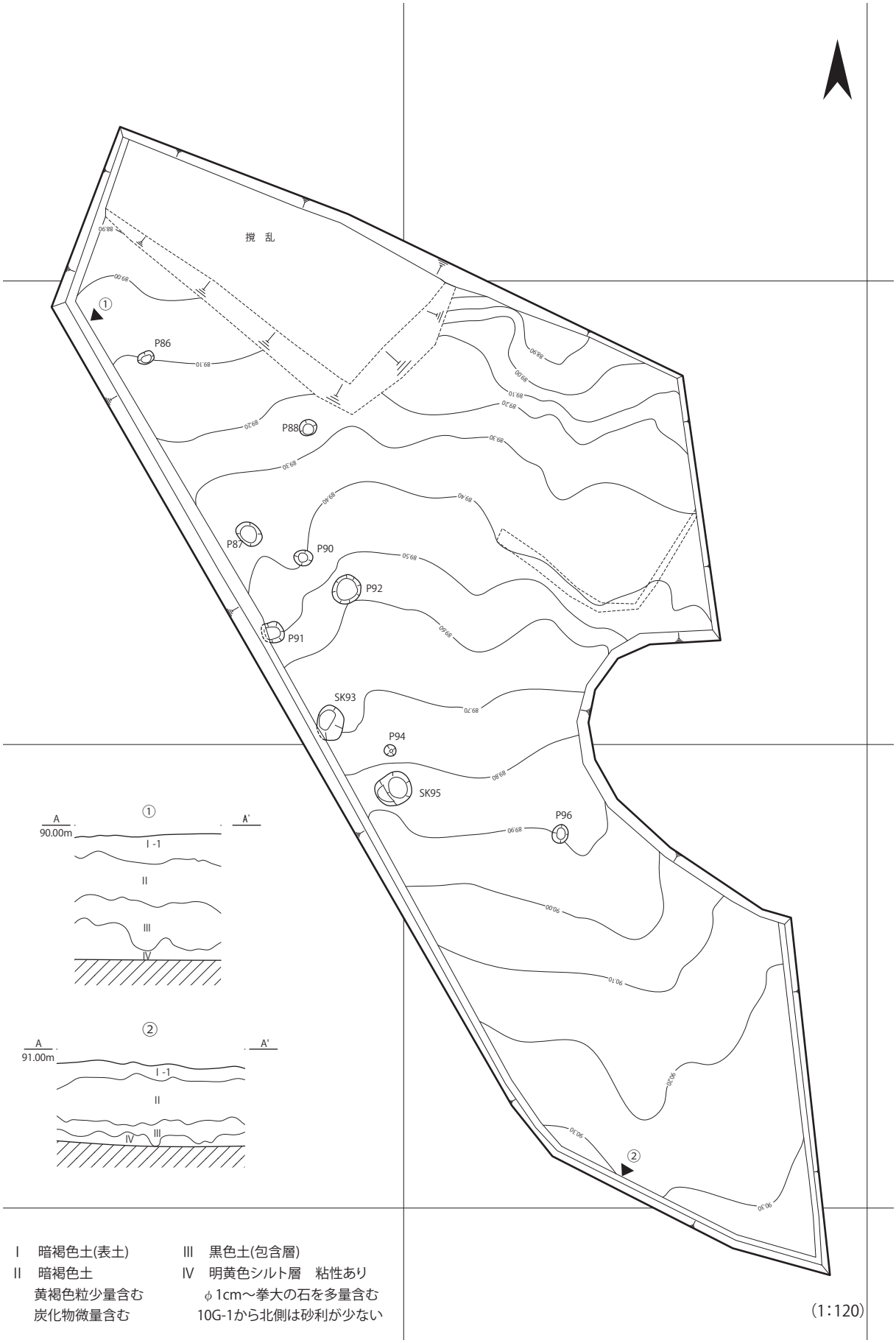
・・・・・磨滅範囲　・・・・・被熱範囲

遺物写真の縮尺は、実測図と同じである。

各実測図に出土位置を記したが、記載のないものは全て包含層出土である。

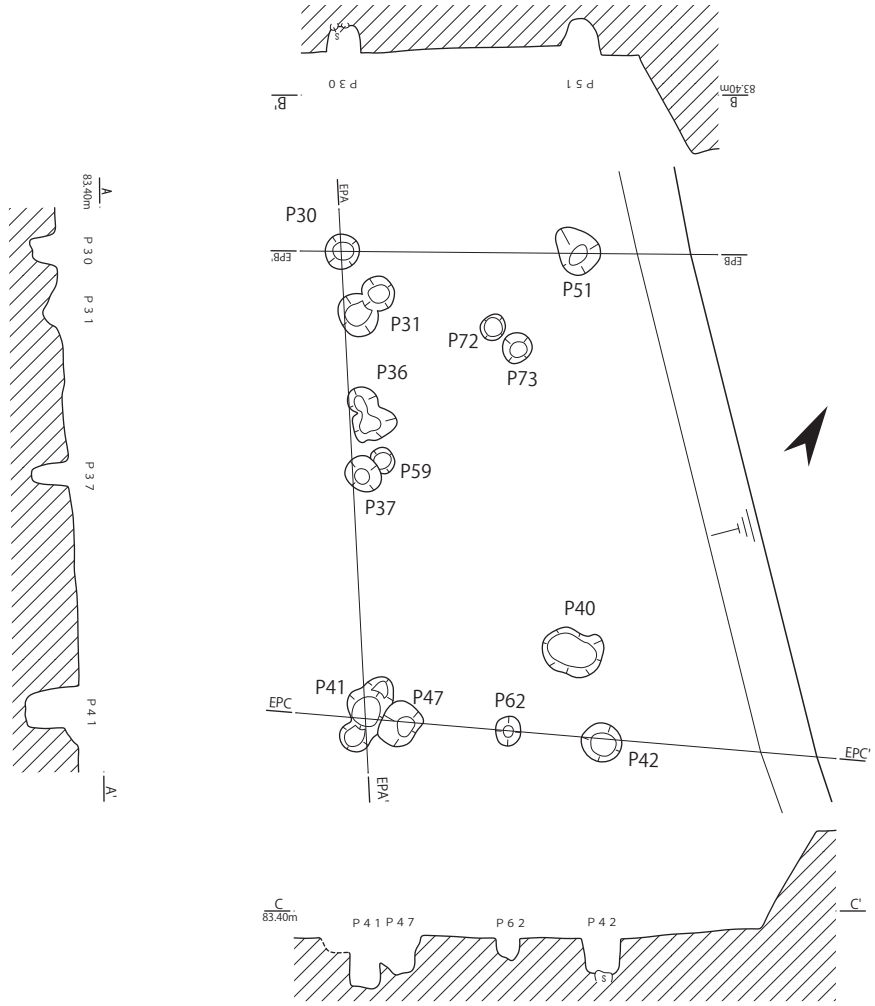

A B C D E F G H
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
0 (1：750) 20m
87.9
81.3
96.
大グリッド設定
1 2 3 4 5
6 7 8 9 10
11 12 13 14 15
16 17 18 19 20
21 22 23 24 25
小グリッド配置


1区西壁セクション
A
A'
84.80m
盛土（黒褐色土）
I-1
I-2
I-3
II-1
II-2
III
IV
P67
I-1　褐色土(耕作土)
I-2　褐色土　粘性強い
浅黄橙～黄橙色土少量含む
上流からの土石流堆積
I-3　浅黄橙～黄橙土　粘性強い
上流からの土石流堆積
II-1　黒褐色土
炭化物中量
浅黄橙～明黄褐色粒多量含む
II-2　黒褐色土　粘性あり
炭化物微量
III　黒色土(包含層)
砂利～礫多量含む
黒褐色土少量含む
IV　黄褐色砂質土　しまり強い
砂利～礫多量含む
撹乱
試掘トレンチ
SK27
SK48
SK49
SK52
SD55
SD67
P1
P2
P3
P5
P7
P8
P9
P12
P13
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P28
P29
P30
P31
P32
P34
P35
P36
P37
P39
P40
P41
P42
P43
P44
P45
P46
P47
P50
P51
P53
P54
P56
P57
P58
P59
P60
P61
P62
P63
P65
P66
P68
P69
P70
P71
P72
P73
P74
P75
P77
P78
P79
P80
P81
P82
P83
P84
82.80
82.70
82.90
83.00
83.10
83.20
83.30
83.40
83.50
83.60
（1：150）

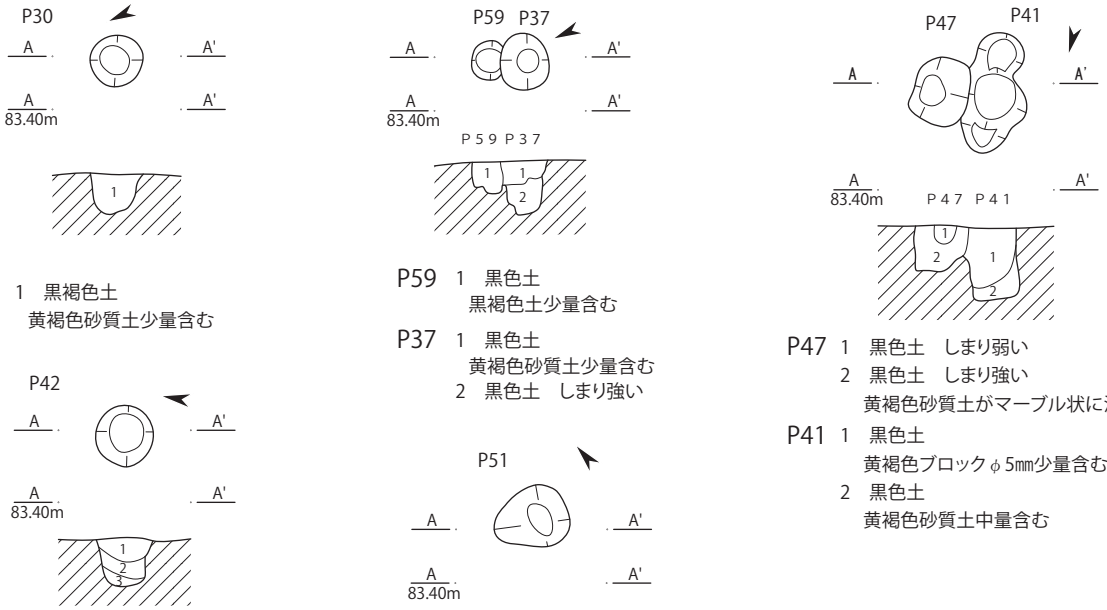


Ⅰ　暗褐色土(表土)
Ⅱ　暗褐色土
黄褐色粒少量含む
炭化物微量含む

Ⅲ　黒色土(包含層)
Ⅳ　明黄色シルト層　粘性あり
φ1cm～拳大の石を多量含む
10G-1から北側は砂利が少ない



(1：60)



P30
1　黒褐色土
黄褐色砂質土少量含む

P59　1　黒色土
黒褐色土少量含む

P37　1　黒色土
黄褐色砂質土少量含む
2　黒色土　しまり強い

P47　1　黒色土　しまり弱い
2　黒色土　しまり強い
黄褐色砂質土がマーブル状に混ざる

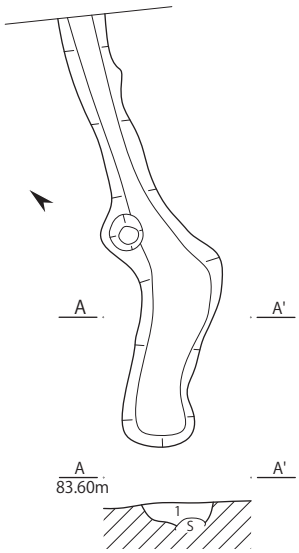
P41　1　黒色土
黄褐色ブロックφ5㎜少量含む
2　黒色土
黄褐色砂質土中量含む

P42
1　黒色土
暗褐色土少量含む
炭化物微量含む
2　黄褐色土
黒色土中量含む
3　黒色土

P51
1　黒色土
黄褐色砂質土少量含む
炭化物微量含む

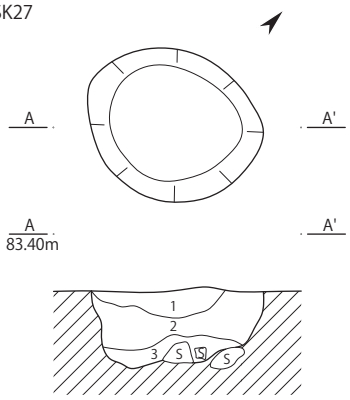
(1:40)

SD55



1　黒色土
　黄褐色砂質土少量含む

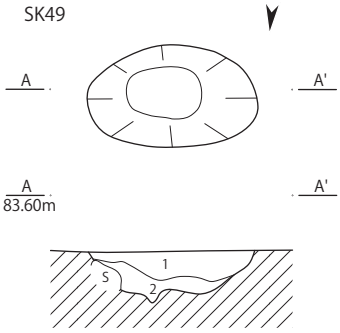
SK27



1　黒褐色土
　炭化物少量含む
　褐色砂質土少量含む
　拳大の石含む

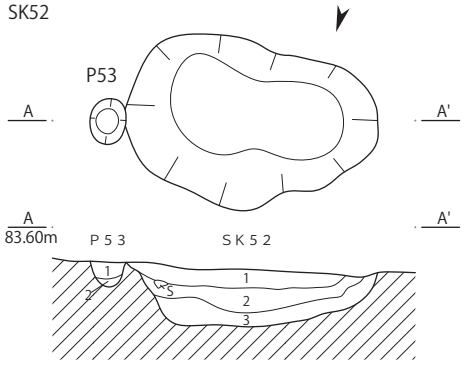
2　黒色土
　炭化物少量含む
　黄褐色砂質土中量含む
3　黄褐色砂質土と黒色土の混ざり
　拳大の礫含む

SK49



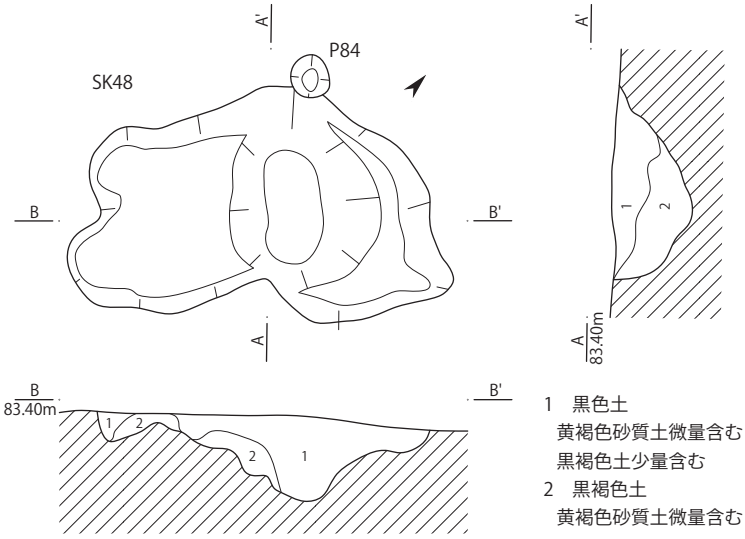
1　黒色土
　黒褐色土少量
　黄褐色砂質土微量含む
2　黒色土＋黒褐色土

SK52



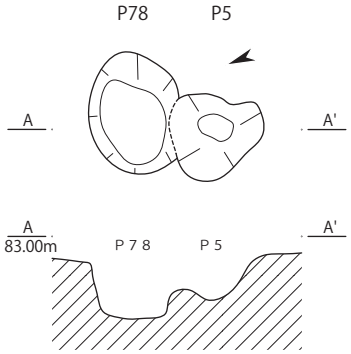
P53
1　黒色土
　黄褐色砂質土微量含む
2　黒色土
　黄褐色砂質土中量含む

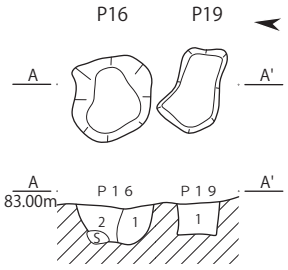
SK52
1　黒褐色土
　黄褐色粒微量含む
2　黒褐色土
　黒色土中量含む
3　黒色土



1　黒色土
　黄褐色砂質土微量含む
　黒褐色土少量含む
2　黒褐色土
　黄褐色砂質土微量含む

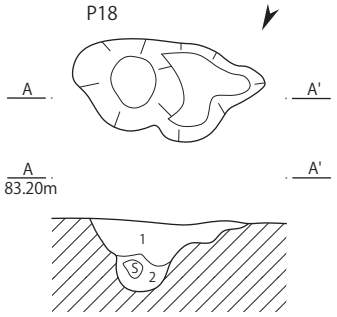
（1：40）



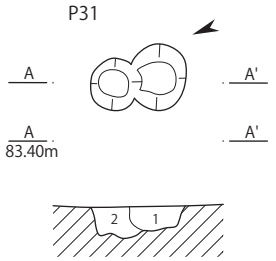


P16
1　黒色土　しまり強い
　にぶい黄褐色土中量含む
2　暗褐色土　しまり弱い
　黒色土少量含む

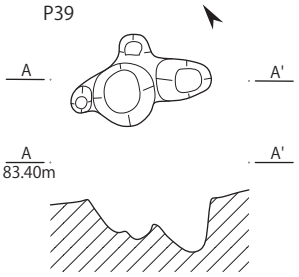
P19
1　黒色土
　黄褐色砂質土少量含む
　炭化物微量含む

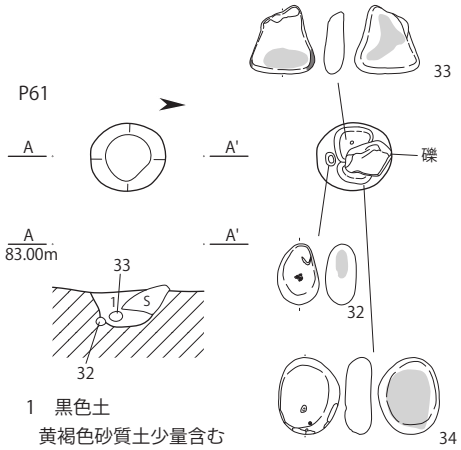


1　黒褐色土
　炭化物微量含む
2　黒色土
　黄褐色砂質土少量含む



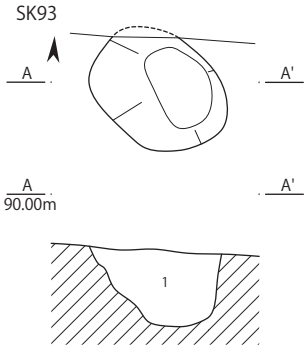
1　黒色土　しまり強い
　黄褐色砂質土微量含む
2　黒色土　しまり普通
　黄褐色砂質土少量含む



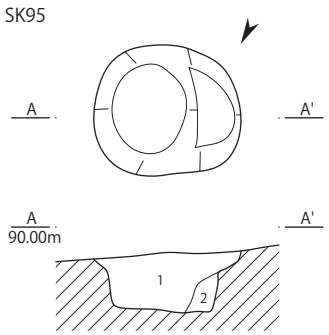


1　黒色土
　黄褐色砂質土少量含む
　φ20cm程度の石含む

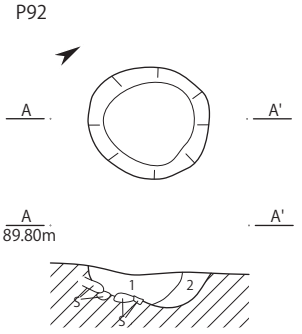
2区



1　黒色土
　黄褐色土少量含む

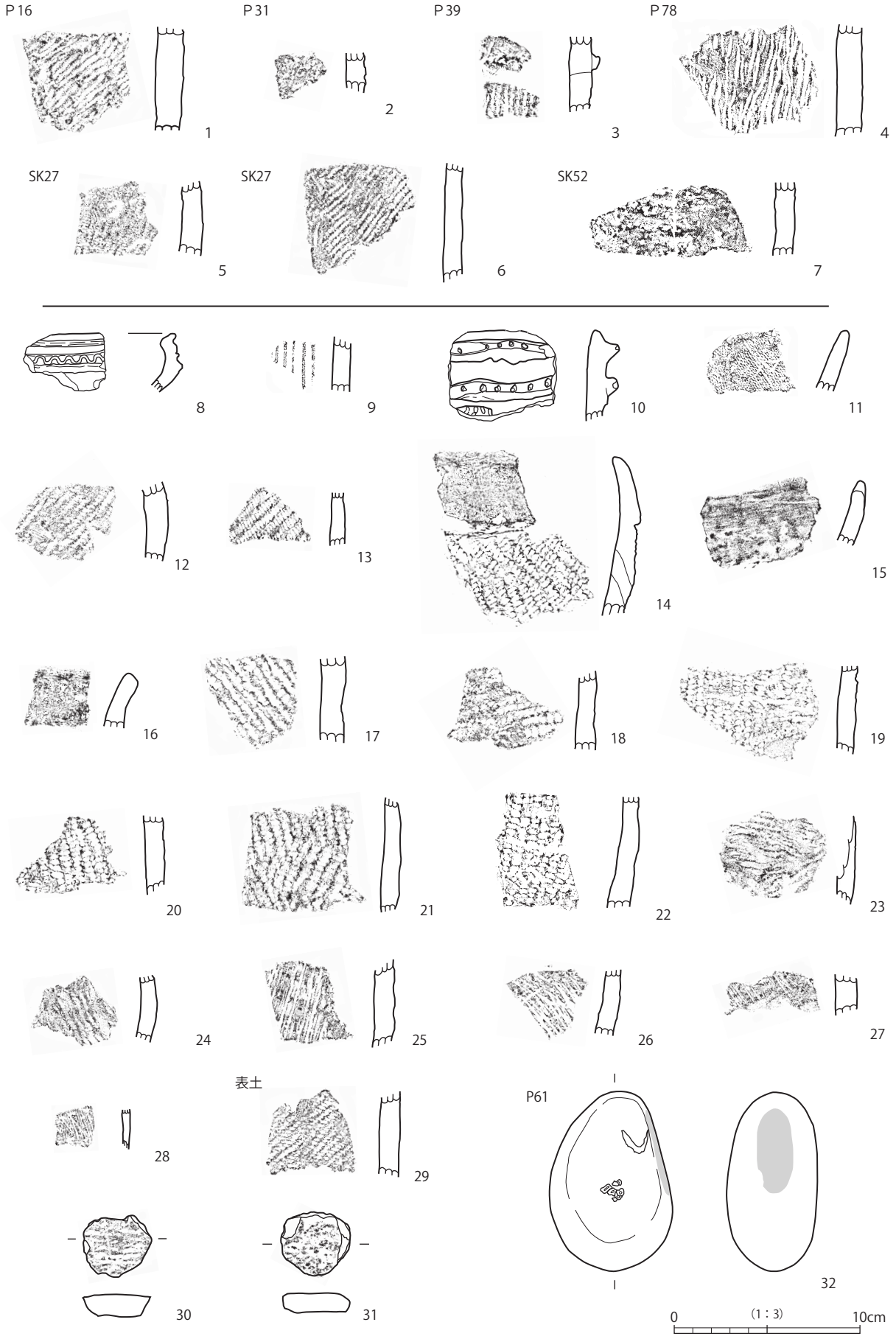


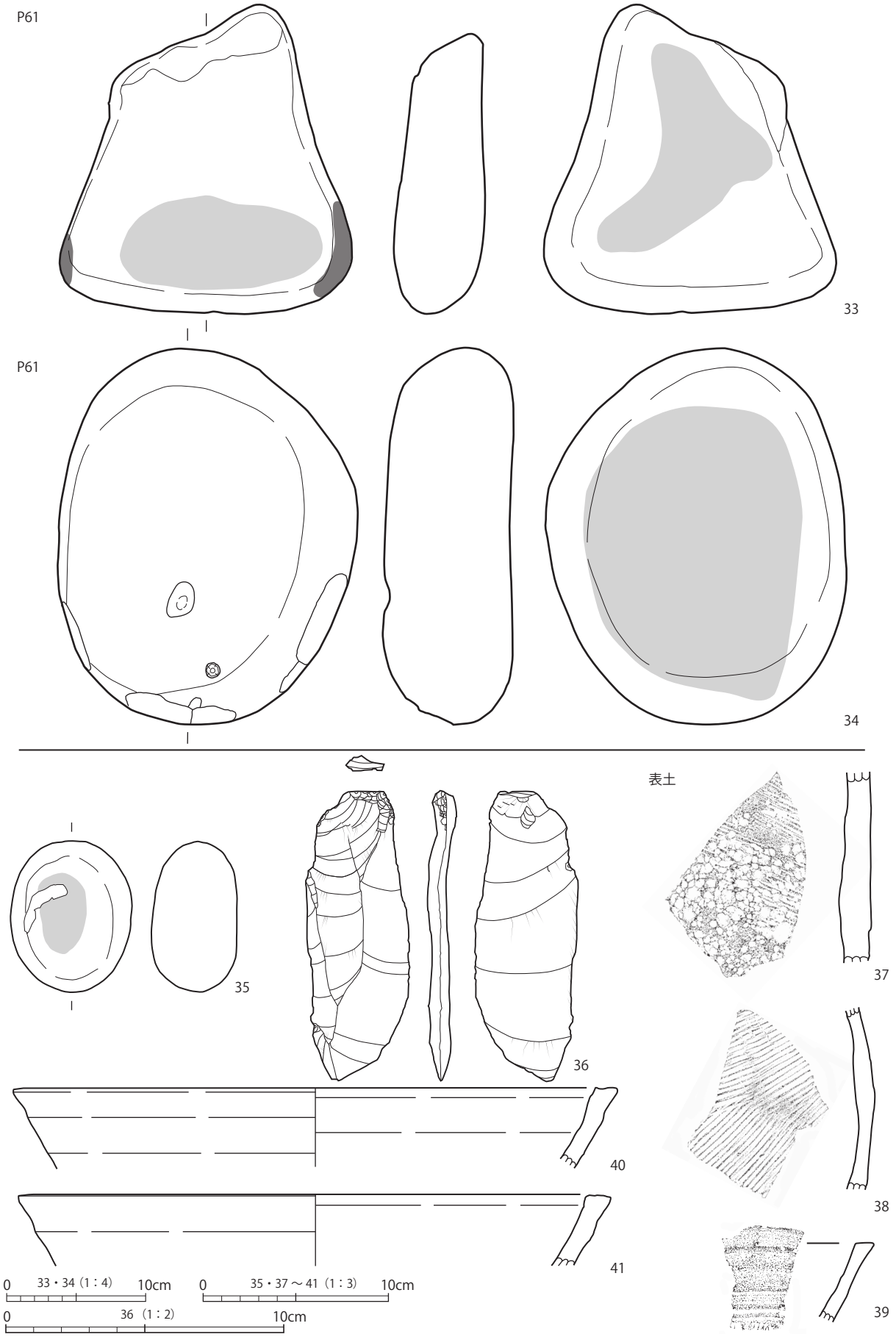
1　黒色土
　明黄色粒少量含む
　褐色土少量含む
2　黒色土　しまり強い
　明黄褐色土多量含む



1　黒色土
　にぶい黄褐色土微量含む
2　黒色土
　にぶい黄褐色土少量含む
　φ5〜10cm礫含む

(1:40)


P16
1
P31
2
P39
3
P78
4
SK27
5
SK27
6
SK52
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
表土
29
P61
30
31
32
0
(1：3)
10cm


P61
33
P61
34
表土
35
36
37
38
39
40
41
0　33・34（1：4）　10cm
0　35・37～41（1：3）　10cm
0　36（1：2）　10cm

調査区近景（南東から）

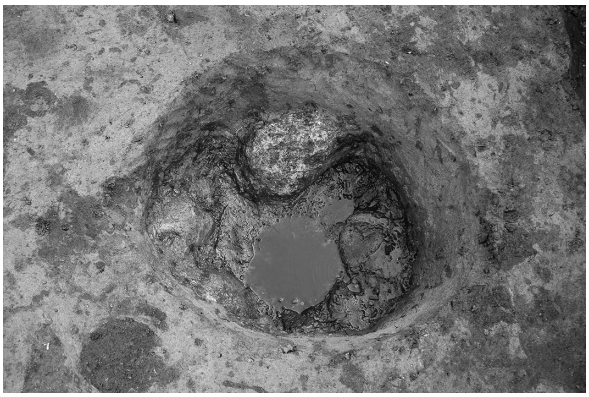
調査区全体写真（東から）

1 区全体写真（西から）

P41 断面（北から）

P51 断面（西から）

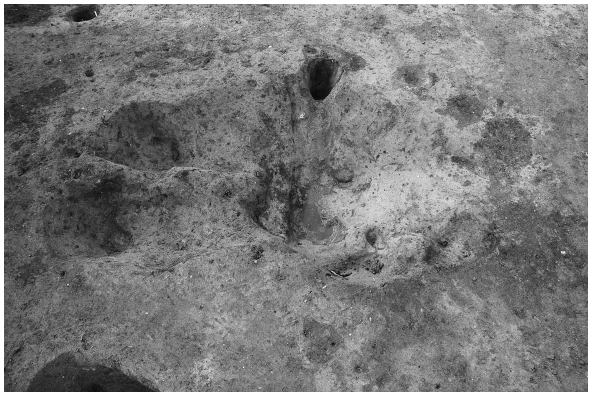
SD55 完掘（西から）



SK27 完掘状況（北から）

SK48A ライン断面（東から）

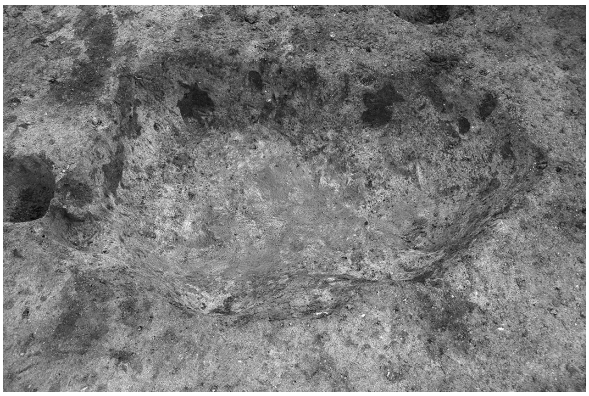
SK48B ライン断面（南から）



SK48 完掘状況（南から）

SK49 断面（北から）

SK52 断面（北から）



SK52 完掘（北から）

P61 断面（南から）

作業風景

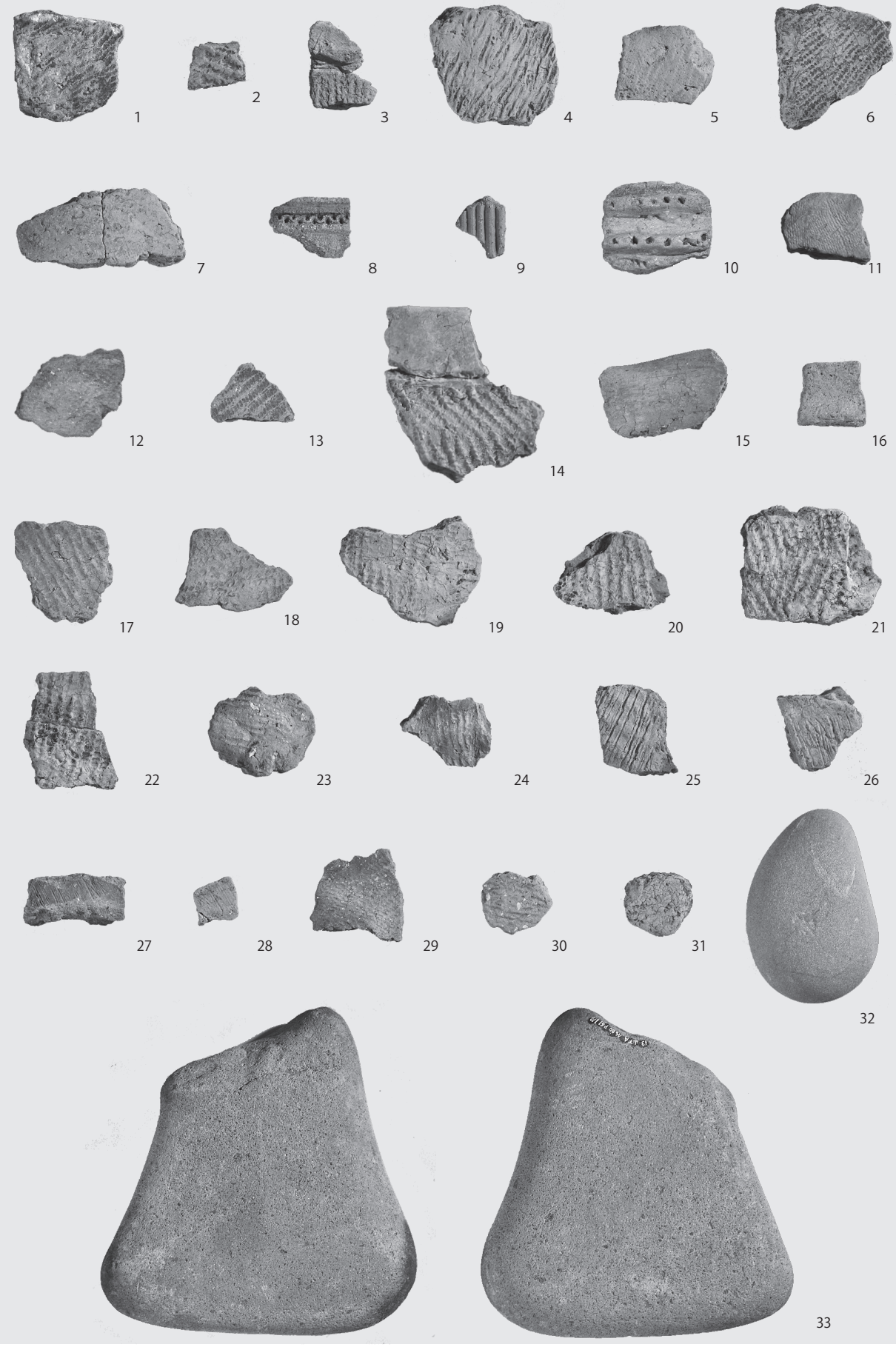
２区調査写真（南東から）

SK93 断面（東から）

SK95 断面（北から）

P92 断面（南から）

２区遺物出土状況


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

34

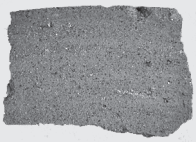
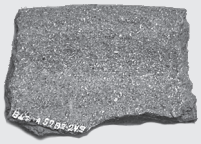
35

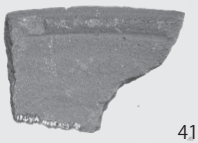
36

37

38

39



40


41

報告書抄録

ふりがな	さんかえーいせき
書名	山下A遺跡
副書名	市道山通96号線ほか改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山賀和也
編集機関	長岡市教育委員会
所在地	〒940－0072　新潟県長岡市柳原町2番地1　　TEL0258－32－0546
発行年月日	2014年2月14日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
山下A遺跡（さんかえーいせき）	新潟県長岡市柿町（にいがたけんながおかしかぎまち）3899番地ほか	15021	9	37°24′17″	138°52′16″	20131007～20131115	500㎡	市道改修事業

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
山下A遺跡（さんかえーいせき）	集落跡	縄文時代中期前葉～後期前葉	土坑・ピット	縄文土器・石皿	
		中世	掘立柱建物跡・土坑・ピット	珠洲焼	

山下A遺跡

市道山通96号線ほか改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成26(2014)年2月14日　印刷

平成26(2014)年2月14日　発行

発　行　　新潟県長岡市教育委員会

印　刷　　株式会社第一印刷所